

# DAIHOU SHOTENGAJI



用水路の上の商店街。来たる20年後にむけて。

## 大豊商店街

JR豊橋駅前、東西を流れる牟呂用水の上に建てられた通称・水上ビルに構える大豊商店街。2003年頃には高齢化が進み、閉める店舗も多くありました。ただ、活気を取り戻そうにも職住一体化された建物には、いくつものハードルがあり…。課題に直面するなか、2004年、若者たちが中心となりアートイベントを開催。その挑戦が、再びまちを動かしました。

2015年、水上ビル50周年を迎えて発表した「20年生き延びる宣言」から約10年を経て、新たに「シン20年生き延びる宣言」を発表。来たる未来へ、大豊商店街は美しい終着点を目指し、歩み始めています。



事例集は「あいち商店街空き店舗情報ナビ」でもご覧いただけます



2003年頃  
商店街としては底!?



1949 豊橋市民市場協同組合創立

1950 大豊商店街誕生

狭間小学校跡地に木造の雑居マーケットが誕生。「大きな豊橋を目指して」と願いを込めて「だいほうマーケット(のちの大豊商店街)」と命名。

1964 大豊ビル 完成

1965 豊橋ビル 完成

1967 大手ビル 完成

再開発のため立ち退きを要求される。防災や美観の観点から商店街の再開発が計画されたが、移転先がなく苦肉の策で水路の上にビルを建設(通称:水上ビル)し、大豊ビルの1階部分に新たな「大豊商店街」を移転開業。1階を店舗、2~3階を住居にしている。



(写真提供:大豊商店街)

2004 **ターニングポイント**  
アートイベント  
「sebone」



水上ビルが「まちの背骨」に見えることから「sebone」。既存の店舗内にも、空き店舗内にもアートを展示。地下のバスターミナル駐車場でライブをしたり、空きビルになった名豊ビルにアート展示したり、若者ならではの斬新な発想が人を呼び、まちの開拓のきっかけに。(写真提供:大豊商店街)

学生や若いアーティストたちが企画したことで、みんなが話を聞いてくれた

「sebone」も今年で20周年!

2008 「駅デザ会議」設立

豊橋駅前大通地区における今後のまちづくり及びまちなみ形成の推進方策について検討し、地区の良好な環境の整備及び活性化を図ることを目的に設立。

2014年、黒野さんが理事長に就任。

2011年東日本大震災をきっかけに都市部から地方へ目が向くことになった (黒野理事長)

建築家として鉄筋コンクリート造の水上ビルが寿命80年と判断 (黒野理事長)

2015 **ターニングポイント**  
水上ビル 50周年  
「20年生き延びる宣言」

店仕舞いに向けての20年、新しく入る人への20年。

「DAIHOU Journal」  
1号発行

年4回発行、理事長のコラムを発信するために始まった。



イベントに人があつまり、空き店舗のシャッターがなくて出店者がいる様子に、地元のおじいさんおばさんも嬉しそうだった

アンティークマーケット  
「雨の日商店街」

梅雨の時期に行う晴天決行のイベントで、空き店舗を利用したアンティークマーケットが始まる。ビルの雰囲気と合う。

空き店舗の持ち主にとっても、店を活用する、人に貸すことの練習になった。借りる側も什器を並べてみると、実店舗のイメージができて、その後の賃貸につながった



撮影/中西一朗

2016 **波及効果 イベント実施**  
あいちトリエンナーレ2016

水上ビル一帯が会場に選出。

**取組成果**

空き店舗がなくなり、「雨の日商店街」は一旦役目を終え、現在は軒先マルシェに形を変えて継続中。



(写真提供:大豊商店街)

2019 「DAIHOUつながるマーケット」

雨の日商店街から生まれたお店同士、お客さん同士のつながりで人の往来が盛んになり、徐々に縁となり広がっていった。さらに商店街全体に広げようと、DAIHOUつながるマーケットがスタート。

2021 豊橋市まちなか図書館  
「emCAMPUS EAST」完成

人出が必ずしも「にぎわい」ではない。昔のような日常の大通りは、今の商店街では望めない。商店街の在り方や目指す姿が大きく変わった (黒野理事長)

**取組成果・波及効果**

「20年生き延びる宣言」の2015年から今も変わらず続く店は全体53店中、約半数。当時12店舗ほど空き店舗があったが、テナント入居や世代交代での商売替えなどを重ね、今やついに「空き店舗ゼロ」となった。将来のビジョンが具体的に見えたことで、代々続ける店、世代交代する店、次の利用者呼び込む店など前に進んでいる。

2023 「シン20年生き延びる宣言」

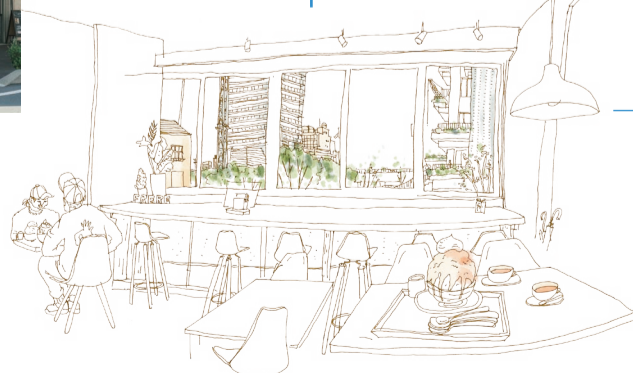
30年は長くて実感がわかないが、20年は想像しやすい (黒野理事長)

これから先の20年を見据えて

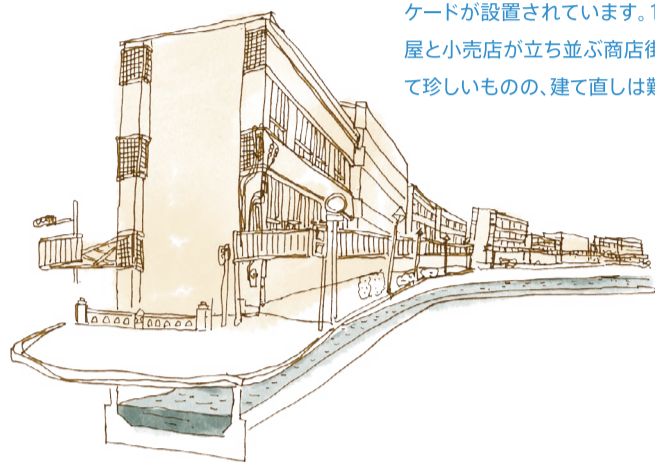
- ・店子の形態が変わってきているので定款の整備が急がれる
- ・アーケードの修繕にクラウドファンディングを始める
- ・20年後のまちの姿を市と相談していく必要

20年後の終わりにむけて出来ることをポジティブに取り組む!

今後の課題



## 水上ビル (すいじょうビル)



豊橋駅から東に向かう駅前大通りに並行して流れる農業用水の牟呂用水を約800メートルにわたって暗渠化し、その上に建てられた3～5階建てのビル15棟の通称。西側から順に「豊橋ビル」、「大豊(だいほう)ビル」、「大手ビル」の3群で形成され、ビルの両側にはアーケードが設置されています。1964年、大豊ビルの1階部分に開業した大豊商店街は、卸問屋と小売店が立ち並ぶ商店街として発展しました。用水上に建設されたビルは全国的に見て珍しいものの、建て直しは難しいとされています。



## 建築家の帰郷、そして20年生き延びる宣言！

>>北川さん

黒野さんが東京から生まれ故郷である豊橋に戻られた2003年頃の大豊商店街はどんな様子でしたか？

>>黒野理事長

店主の高齢化が進み、自分の店を閉めて暮らしているだけ、という人が徐々に増え始めていました。職住一体型として建造されたビルなので、店としてはシャッターが降りたままでも、中には住人がいるわけです。1階の店舗部分だけを人に貸そうにも、長らくこのスタイルで生きていたお年寄りには、いくつものハードルがあります。そもそもの造りが住居兼店舗なので、トイレが2階にしかなかったり、店舗を通らないと2階に行けなかったり、店舗と居住スペースが明確に分かれていないので、自分のパーソナルなエリアに人を入れることへのためらいもあります。誰かに貸そうと思うと工事が必要になるし、そのための資金を用意しなくては行けない。年配の店主たちはその点に疎いので、結果、倉庫のような状態で放置されるケースが増えていく、という状態でした。そんな頃に、水上ビルを「まちの背骨」に見立てたアートイベント「sebone」が始まりました。軒先や空き店舗にアートを展示させてほしいと、大学生や若い人たちが頼みに来ることで、ちょっとシャッターを開けようとか、中を片付けようとか、場を開く良いきっかけになってくれました。

>>北川さん

アートを楽しみに来る人たちに、水上ビルを知ってもらえる機会でもありますよね。住んでいる人にとっては古びた建物でも、若い人にとってはそれが逆にヴィンテージ的な価値になるし、こんな場所に昭和から続く花火や玩具の卸問屋さんがまだ立ち並んでいて、大人買える面白さも発見だったと思います。

>>黒野理事長

若い人たちにもっと水上ビルを認知して、活用してもらうため、2014年に大豊協同組合の理事長に就任してすぐに「20年生き延びる宣言」を打ち出しました。水上ビルが建ててちょうど50周年のタイミングでもあり、周りでは老朽化から取り壊しの噂も出ていましたが、建築家の目で見ると、鉄筋コンクリート建築の寿命はまだ残っていました。「20年生き延びる宣言」にはふたつの意味を含めていて、あと20年は安心して使えるのでどうぞ来てください、という新たな出店者さん呼び込む目的がひとつ。もうひとつは、店主さんたちに向けて、残りの期間を公言することで、そろそろ仕舞い方の準備を始めてくださいね、というメッセージです。水上ビルの建て直しは難しいので、今のところ建物の寿命をまっとうしたら、僕たちは出ていくしかありません。終わるまでの20年をどう生きるかが課題で、なるべく元気に生き延びれば、また新しい道が開けるはず、と思っています。

いざとなったら  
一丸となる強さのある商店街

黒野 有一郎さん  
水上ビルの卸問屋さんで生まれ育った建築タレント代表で商店街の理事長。



鄙びた建物も、雨も  
ここでは味わい深い魅力に

北川 裕子さん  
豊橋生まれのライター編集者。「DAIHOU journal」も手掛ける。





## DAIHOU Journalの発行と雨の日商店街

>>北川さん

私が大豊商店街に関わるきっかけは、2015年、50周年祭のタイミングでした。大豊商店街自体は戦後まもなく始まった青空市場が端緒なので、もっと歴史が長いですが、水上ビルに移ってからちょうど50年が経ったということで、それを告知するポスター、アーケードの装飾フラッグなどの制作を依頼してもらいました。少し前に地方新聞に発表された「20年生き延びる宣言」を読んでいたため、これを周知していくために、もう少し予算を捻出していただき、商店街独自のタブロイド紙「DAIHOU Journal」を作って、1年の間、四季ごとに繰り返し発行して広めていくのはどうでしょう?といった提案をしました。

>>黒野理事長

年4回発行となると、最初に出す3月号で50年の歴史を伝えて、9月はアートイベント「sebone」があるのでその告知、12月は歳末大売り出しと、季節ごとにしたいネタがあったのですが、6月だけ何もないねと。どうしようかという話の中で出てきたのが、梅雨時だからこそアーケードでイベントができる!という「雨の日商店街」のアイデアでした。

>>北川さん

普通はイベントも打ちにくいし、買い物やお出かけにとってもネガティブな雨というワードですが、南北両サイ

ドにアーケードのある大豊商店街なら、梅雨時は逆にチャンス。出店したい人にとってもイベントが少ない時期なので声を掛けやすいというメリットもありました。今もロゴに使っていますが、「晴天決行!雨の日商店街」と、雨を前提に言い切ったのも、6月のイベントを印象付けるのに役立ってくれたと思います。コンクリート打ちっぱなしの壁にアンティークやヴィンテージの家具が並んだらそれだけでカッコいいので、知り合いのアンティークショップを中心に声を掛けて協力してくれる人を募りました。テントやブースで出店するイベントと大きく違うのは、空き店舗の空間を1人か、多くても3人くらいのシェアにして、それぞれ自分のお店のようにディスプレイしてもらった点です。空き店舗ごとにコンクリートの壁のがらんどろ状態だったり、居抜き物件で什器が残っていたり、状態も条件もさまざま。出店してくれる人を物件ごとにマッチングして、念入りに準備してくれる人では、大掃除から始めて1~2週間かけて商品運び込み、新規オープンしながらにショップを作り上げてくれました。そのおかげで、商店街の古いお店と新たなポップアップショップが渾然と混ざり合う不思議な光景が立ちのぼり、一過性のイベントでは生まれない効果をもたらしてくれたのだと思います。古き良きものを愛する出店者さんたちが、昔ながらの商店に眠っていたデッドストックからお宝を見つけたり、閉店した食堂の食器やグラスが売れたり、新旧が交わることでいろいろと楽しい相乗効果も生まれました。

## 60周年を前に、シン20年生き延びる宣言!

>>黒野理事長

「雨の日商店街」は4日間ですが、空き店舗対策としても、大家さんが店舗を貸す体験学習の効果がありました。それにシャッターがほぼ全部開いて、人がいっぱい来てくれると、往年の姿を思い出して、やっぱり商店街のお年寄りもみんな嬉しいんですよ。商店街のおじいさん、おばあさんたちが家族や友達を連れて、アーケードを何度も散歩する姿が見られて、こちらも嬉しかったです。しかもこの場所に店を出したらこんなにカッコよくなるんだ、というのを雨の日商店街の出店者さんたちが見事に表現してくれたおかげで、その後、参加者の中から、来街者の中からも、水上ビルに実際にお店を出したいという若い人が次々現れました。続く2016年のあいちトリエンナーレでは豊橋も会場となり、水上ビルも本会場のひとつに選ばれましたが、アートイベント「sebone」や「雨の日商店街」の経験から店主さんたちの理解を得やすくなっていたことで、いろいろなことをスムーズに進めることができました。穂の国とよはし芸術劇場PLATから水上ビルへと連なるルートを明確にできたこと、アートや文化に興味ある人たちの縁ができたことで、トリエンナーレの後は大豊商店街にさらにユニークな人材が増え、文化的なイベントや発信もできる

ようになりました。ここまでの流れと駅前再開発の機運があいまって、現在、空き店舗はほぼ無い状態となっています。最近では2階店舗も増えつつあり、さらに水上ビルの大豊商店街以外の場所にも出店が増えるなど、波及効果が出ています。水上ビルは2024年12月に還暦を迎えますが、これを前に、2023年6月に発行した「DAIHOU Journal」紙上で、「シン20年生き延びる宣言」を発表しました(笑)。これは根拠なく10年延長したわけではなく、建設時の図面やコンクリートの調査から、2014年の時点であと30年は大丈夫だと判っていましたが、老後を迎えるお年寄りや、これからお店をやろうとする若い世代にとって、30年というスパンは長過ぎるだろうと。将来を想像しやすい20年で区切っただけなので、還暦からの20年が、本当のラスト20年と考えています。大豊商店街は、戦後の焼け野原から店主たちが力を合わせて、これだけのビルを建てたという、いざという時に一丸となる強みがあります。この先にはアーケード修繕、最後にはビルの解体まで、長く重い課題がありますが、お年寄りを元気づけながら、生き延びていくための仲間を集め、美しい終わり方を迎える準備をしています。



発行/愛知県経済産業局中小企業部商業流通課  
企画・編集・デザイン/株式会社ナゴノダナバンク  
藤田まや、市原正人(アドバイス)、高橋幸大(サポート)  
安井加奈子、鈴木真理(テキスト編集)、安達麻未(MAP)

イラスト/大角真子  
写真(メイン、コラージュ)/fujico  
対談ライティング/北川裕子

2023年12月発行

掲載情報は2023年12月時点のものです。